

北海道土を考える会 十勝支部 2026冬期研修会を開催しました。

2026年3月6日

北海道土を考える会 十勝支部は、2026年2月24日(火)、十勝川温泉 観月苑にて冬期研修会を開催しました。十勝支部ではこれまでに5箇所の土壌断面調査を実施しており、今回は、昨年10月に穴掘りを行った帯広市太平町・奥山農場様の土壌断面調査結果をもとに勉強会を行いました。

はじめに、農研機構 農業環境研究部門の前島先生より、圃場周辺の地形的特徴についての説明や、断面調査時に奥山さんから聞き取りを行った作業体系や栽培作物、堆肥投入など土づくりの取り組みを踏まえながら、土壌断面調査結果の解説が行われました。調査結果について、圃場内に数多く埋まっていた巨礫を親子二代に渡って取り除き、約45cmの作土層を築いてきた経緯に触れ、前島先生は「二世代の土づくりが体现されている土壌断面」と総括されました。

続いて、帯広畜産大学の谷昌幸教授より、「まったなし」のリン減肥をテーマとした講演が行われました。寒冷地の黒ボク土においてはリンの肥沃度が重要とされ、これまで積極的にリン肥料の施用を行ってきたこと、その結果、現在はリンの肥沃度が改善し、減肥の段階に入っているとの説明があり、「不足しているところには入れる、足りているところには入れない」施肥方法を推奨されました。また、事前に参加者から募集した土壌診断表は約20名分集まり、一つひとつに対して改善点のコメントや質疑応答が行われるなど、実践的な学びの時間となりました。

↑ 研修会の様子。総勢で約100名の参加者が集まりました。



北海道土を考える会
北川会長

研修会の終了にあたり、北海道土を考える会 北川会長より、「数年にわたり土壌をテーマとした研修会を重ねてきたことで、前島先生や谷教授のお話が年々理解できるようになってきた」と、これまでの研修会を振り返る挨拶がありました。

研修会終了後には懇親会が開催され、参加者同士の親睦を深めました。翌日は総会が開催され、緑肥の腐食が早く進行する鋤き込み深さや裁断サイズについて、北海道土を考える会では実験を重ねてきたことに触れながら、今年の夏の研修会ではどういった企画を行うかについて協議されました。また、十勝支部長を務められた田中支部長に代わり、次期支部長として小尾さんが

任命されました。



← 懇親会の様子。小尾次期支部長による一本締め。



← 二次会の様子。



十勝支部
田中 支部長



十勝支部
小尾 次期支部長

さらに、来年は北海道土を考える会が50周年を迎えるほか、帯広市にて国際農業機械展開催も予定されており、今後の活動の展開について意見交換が行われました。



2026 北海道土を考える会 十勝支部冬期研修会



2025
10/21
調査



奥山さんへモノリス贈呈
(左:谷教授 右:前島先生)

前島先生の断面ひとくちコメント

北海道帯広市太平町 奥山農場(前作:小麦)

十勝平野の川西台地上に位置し、扇状地の扇頂部(扇の要部分に相当)に年代の異なる火山灰や沖積堆積物が堆積してできた黒ボク土です。深さ45cmまでは樽前c火山灰で、有機物に富む黒色の作土層が形成され、22インチプラウで反転耕起され、35cm付近に麦稈が鋤き込まれています。45-64cmは恵庭aロームと軽石が混在する褐色土層となり、ボール状の構造が観察できます。さらに64-98cmまでは粘土質、98-138cmまではシルト質な層、最下部にはやや青味がかった砂層へと続きます。この圃場は扇状地の扇頂部に位置するため、山地から吐き出された巨礫を含む土砂や火山灰が水によって運ばれ堆積しており、黒ボク土と沖積土の双方の特徴を有します。聞き取り調査によると、圃場を借り受けた約30年前には巨礫だらけの畑だったそうで、栽培後のプラウ耕起で地表に上がってきた石を拾い続け、除礫を行った結果、現在のよう土層になったとのこと。また、水による堆積のため、土層全体は硬く締っており、定期的ハーフソイラによる心土破砕を行い、表面の余剰水を速やかに深部へ浸透させて排水対策を行っています。50-70cm付近の大きな亀裂はハーフソイラ施工による亀裂と考えられます。さらに70cm以下には開拓前の樹木の根跡に沿って管状の斑鉄が観察でき、径2-5mmの中空状の管が多数存在し、天然の暗渠として機能しているため、全層を通じて酸欠な土層は見当たりませんでした。親子2代による地道な土づくりの営みが土壌断面に刻印されています。